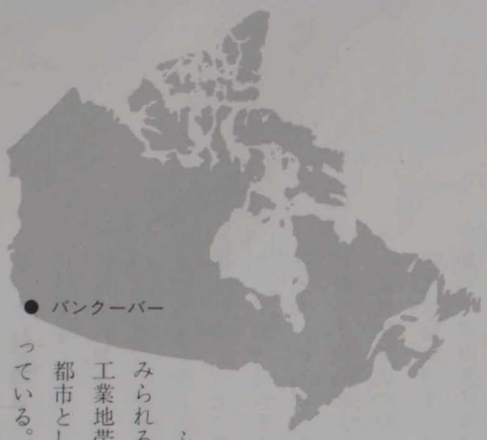
われら姉妹都市

2

横浜&バンクーバー

山崎隆弘



横浜の姉妹都市バンクーバーは、市そのものが公園といわれるほど深い緑と清らかな水にあふれている一方、人口約四十一万人、面積百十四平方キロメートルをもつカナダ第三の近代的大都市でもある。バンクーバー港は「太平洋の玄関」として貿易面で大きな役割を果たしてきた。また市内には日系人も多く、カナダで最も親日的な都市といわれている。市中心部は、数多くの近代的高層建築が建ち並び、活気に満ちた雰囲気をかもし出している。

これに対して、当横浜は、人口約二百七十八万人、面積四百二十七平方キロメートルを有するわが国第二の大都市であり、最大の国際港湾都市でもある。市内には、山手、元町、中華街など、異国情緒あふれる街並みが随所にみられる反面、臨海部に京浜工業地帯を擁し、重化学工業都市としての性格もあわせもっている。さらに近年、郊外部の人口急増に伴い、首都圏のベッドタウンとしての様相も濃くしている。

両市間の姉妹都市が実現したのは、昭和四十年七月一日のことである。翌四十一年八月には、市民の手による交流活動を目的とする、横浜・バンクーバー友好委員会が誕生し、以後、この委員会を中心として、十七年間にわたり友好が深められてきている。

その交流活動は、姉妹都市活動を行っている他の多くの都市同様に、市民同士の直接的なふれあいを通じた相互理解と友好親善の増進を主要目的としている。従って、友好委員会の事業として、友好代表団の派遣及び受け入れをはじめとする市民の相互交流に重点が置かれてきたことは言うまでもない。

提携以来、五回にわたり代表団をバンクーバー市へ派遣し、また同市から三回にわたって代表団を受け入れているが、回を追うごとに次第にその規模は増している。ことに、昭和五十三年七月に派遣された四回目の使節団、「横浜・バンクーバー市民友好の翼」は、四十九名からなる代表団の他に、別動隊として二十名の「横浜なぎなた連盟」演武班、十一名の青少年民泊組が現地で合流し、総勢八十名にも及ぶものとなった。一行は、市内各地で友好を深めるとともに、日本舞踊やなぎなた演武等の披露によって日本の伝統芸術・武術の紹介にも一役買い、現地市民の歓迎ぶりは盛大そのものであった。市内の日本庭園に設置するため同使節団から寄贈された雪見燈籠は、提携当初に贈られてすでに苔むしている春日燈籠とともに、横浜市民の変わらぬ友情を伝えている。

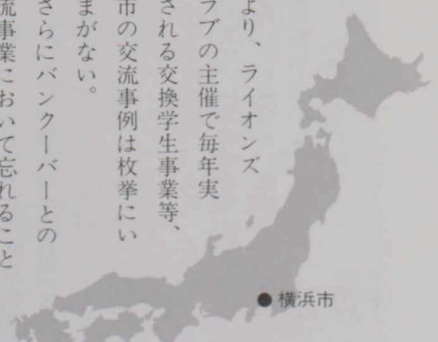
また、昭和四十八年からほぼ毎年、全国体力向上委員会の協力を得てバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学で催されている少年少女のためのカナダ生活体験事業も、一昨年で七回を数えている。バンクーバーの恵まれた自然環境は、青少年が体を鍛え、英語に慣れ親しむことを通して、豊かな人間性と国際感覚を養う上で絶好の場所を提供してくれている。

このほか、一人でも多くの市民に姉妹都市活動について理解を深めてもらうため、随時催される児童画展や写真展はもとより、ライオンズクラブの主催で毎年実施される交換学生事業等、両市の交流事例は枚挙にいとまがない。

さらにバンクーバーとの交流事業において忘れることができないのが、昨年五月に結ばれたバンクーバー港との姉妹港提携である。バンクーバー港は言うまでもなくカナダ最大の外国貿易港であり、連邦運輸大臣の管轄下にある国営の港である。同港の貨物取扱量の四〇パーセントが日本関係であるが、とりわけ横浜との結びつきは深く、昭和五十五年現在、横浜港からのバンクーバー向け輸出は約九万五千トン、輸入は八十四万四千トンにも達している。

姉妹港交流事業としては、港湾実務を中心とした相互の情報交換や広報活動の緊密化と協力、また将来的には港湾セミナーや物産展の開催、研修生の相互派遣等が計画されており、きわめて実利的かつ長期的な試みとして大きな期待が寄せられている。

また、姉妹港提携の一年ほど前には、横浜・バンクーバー両市薬剤師会の姉妹提携も成立しており、将来医薬関係者を中心とした学術交流へ発展する可能性も強い。

（横浜市総務局市長室外事課）

姉妹港提携調印式で握手を交わすマクファーソン・バンクーバー港湾委員長と細郷横浜市長
（昭和56年5月15日）